SLAVISTIKA XIX (2003)

スイチン出版社と識字委員会の出版方針の比較

大 野 斉 子

1. はじめに

民衆向け啓蒙書の増加

19 世紀末は民衆向けの書物が 100 以上の出版社から発行され，出版物の種類も多様化した時期である[1]。その中でも文学や農業技術の本など民衆向けの啓蒙書としての役割をはっきりアピールした本が増加した。啓蒙書が増加した一因としてインテリゲンツィヤがそれまでの活動の成果に失望し，小さな活動を見直す中で，民衆の啓蒙に関心を向けていったという事情があげられる。それと平行して農民を始めとする民衆の側も識字率の向上を通じて重要な読者層として浮上し始めた[2]。

出版社大別，二種類の文学

1997 年出版の『本の歴史』では，この時期に民衆向けの文学の本を出した出版社を大きく二つに分けている。ひとつは良書志向の出版社，もうひとつは民衆独自の文学を出した出版社である。前者として分類されるのが識字委員会，ゼムストヴォ，ほか私営の大きな出版社である。こうした出版社は民衆の読書からルボークや三文文士の書く物語などの俗悪な読み物を排除し，ロシアや外国の古典文学を読ませることを目指した。それに対し後者はインテリゲンツィヤの価値観にもとづく啓蒙を無意味と考え，民衆固有の本を作り上げようとした[3]。だが後者の出版社のほとんどは失敗に終わった。

従来の分類の限界

この二つの分類は民衆啓蒙のための文学を焦点に，イデオロギーの違いを重視して分けたものである。しかしこの分類から零れ落ちてしまう出版社がある。それがスイチン出版社である。

イワン・ドミトリエヴィチ・スイチンは，コストロマ県の書記の子として 1851 年に生まれた[4]。15 歳で書籍や毛皮を扱うシャラーポフ商店に勤めに入った[1]。1883 年に独立し，

---

[1] Книга в России, 1881- 1895. Спб., 1997. С. 165.

[2] Там же. С. 165.

[3] Там же. С. 165.

[4] イワン・スイチン著，松下裕訳『本のための生涯』図書出版社，1991 年，7 頁。

モスクワに書店を構えた。スイチンがまず出版したのは，民族版画と石版画であった[2]。

スイチンは古典も俗悪な書物も両方出版している点で上記の分類からはみ出している。19 世紀末に読者が大きく変わったのは事実だが，それに応じた出版状況の変化をイデオロギーの種類だけで説明するのは無理がある。スイチンは出版者として民衆の啓蒙に多大な貢献をした。だがそれほど明確なイデオロギーは持っておらず，出版活動を通じて無節操とも取れる一貫性のなさを見せることがあった。

1870 年代ごろから世紀末にかけて，ロシアの出版界は大衆化に向かって大きく転換した。スイチンははっきりした良書志向の出版社や失敗の多かったインテリゲンツィヤの出版社とは異なり，幅広い分野の本を出し，事業に成功した新しいタイプの出版社であった。19 世紀末における出版状況の転換がどのように起こったかを知る上で，スイチンの活動は重要な研究材料である。

考察を行う上で，出版社が想定していた読者像を分析対象として取り上げる。出版社の活動は対象となる読者集団を想定することに始まり，最終的に集団ごとの読書をある傾向に導く機能を担っている。先ほどあげたどの出版社にとっても，読者集団を決定し，書物の性格を決定する重要な要素だったのは民衆の定義であった。それぞれの出版社が民衆の読者をどのようにイメージしていたかは各出版社の出版方針を決めるばかりでなく，その後の民衆向けの出版状況を決定する大きな要因でもあった。

スイチン社の特徴を明確にするためにこの論文ではペテルブルグ識字委員会を比較対象として取り上げる。識字委員会はスイチンとは異なる古い読者観，啓蒙観をもつ代表的出版社であり，以後の出版社の啓蒙観の特徴を明確にする上で役立つと考えられるためである。

第 2 章では，識字委員会とスイチンの活動を比較しながらそれぞれの特徴を明らかにする。第 3 章では両者が抱いていた読者像の分析を通じて，両者の異なる出版方針を読者像という観点から考察する。

2. 識字委員会とスイチンの比較

識字委員会の活動経緯

識字委員会は 1861 年に自由経済協会に付属する一時的な機関として発足し，その後 1895 年まで 35 年間活動した。設立の目的はかつての農奴に教育を普及させることだった。設立計画を記した文書には識字委員会の課題が以下のように書かれている。「農民階級に

---

[1] 同書，14 頁。

[2] 同書，37-38 頁。

よりよい農業知識を成功裏に普及させるための唯一の保証となることを目指す。この最後の事柄が帝国自由経済協会の主要な課題である[1]。」識字委員会は農民を主な活動対象とし，農業生産力の向上を実現するためのプロジェクトの一環として農民の教育を位置付けていた。

発足した当初，識字委員会は広い階層から熱烈に支持された。農民階級からも激励の手紙が届くほどであった。ツルゲーネフを初めとする著名な文学者も活動計画の立案に参加した。だが，もとより識字委員会の目指した教育とはその目的，領域ともに限定されたものに過ぎなかった。結局，委員会は最初の 20 年間は目覚しい活動ができず，学校や図書館に書籍を配り，民衆の読書のための本を編纂するにとどまった。

識字委員会の出版活動が本格化したのは 80 年代に入ってからである。80 年から 95 年までに 126 点の本が出版された。部数の合計は約 200 万部であった。活動の最後にあたる 1894 年と 95 年の 2 年間に出版したものは，点数・部数ともにそれまでの 14 年間を上回る規模となった。80 年代以後のこの時期に民衆のための本を改善する試みが始まった[2]。

識字委員会の悪書批判と良書志向

委員会は，民衆の間に広まっている質の悪い読み物を強く批判した。当時民衆向けに安く市場で販売されていたのは，残酷な描写や扇情的な場面を連ねた内容のない読み物や，出版社の注文や作家の裁量により古典を作り変えた読み物を掲載した本がほとんどだった。識字委員会は特に，民衆向けの本の市場が開かれるモスクワのニコリスキイ市場を名指ししてそこで販売される本を駆逐するべき悪書として批判した。

識字委員会が目指したのは良い本を安く売ることであった。書物の値段を下げるために紙質，イラスト，植字などのハード面が犠牲にされがちであったが，こうしたハード面に関しても委員会の明確な良書志向が反映された。識字委員会によると，ニコーラ市場で販売されているのはページに大きな余白をあけて水増しした本であり，紙の質も悪く，民衆向けの本全体の評判を下げかねないものであるという。こうした批判に基づき，識字委員会は装丁にもコストをかけ，表現力豊かなイラストを用い，紙と印刷の質を向上させた本を生産した。識字委員会の本は劣悪な本とは一線を画し，品質と内容の保証された民衆向けの本として書籍市場において権威を確立していった。委員会は民衆，特に農民に安い値段で，ロシアのみならず世界の古典文学の最も良い作品を提供するという路線を貫いた[3]。

---

1 *Блюм А. В.* Издательская деятельность С-Петербургского комитета грамотности (1861-1895) // Книга : Исследования и материалы. 1979. Сб. 38. С. 99-100.

2 Там же. С. 103.

3 Там же. С. 105.

スイチンによる悪書出版

一方，スイチン出版社は民衆向けの本を早い時期から出版していた。スイチンの活動拠点は識字委員会が悪書の巣窟として批判したモスクワのニコーラ市場であった。スイチンはニコーラ市場で売られる本の多くの作家たちと個人的に懇意にしており，彼らの作品を出版していた[1]。

特に大衆向けによく出版されたのは幻想性，恋愛，戦闘シーンが強調されて盛り込まれた短編であった[2]。古典のなかでもこうした特徴を持つ作品が特に好まれて改作され，ゴーゴリやプーシキンは格好の題材とされていた。

スイチンは回想の中でこれに関係するエピソードを書いている。あるとき，スイチンの店に若者が原稿を持ち込んできた。その原稿は『恐怖の一夜，あるいは恐ろしい魔法使い』というタイトルがつけられていた。出版社は持ち込み原稿を読むことなどめったになく，たいていは一見した分量に応じて買い取りの代金を支払うため，このときもスイチンは 15 ルーブルで買い取った。その後原稿を校正にまわしたところ，校正者がやってきてこれはゴーゴリの作品そのままだから出版できないと報告してきたという。その後若者を呼んで 10 ページほど書き直させ，出版にこぎつけたというエピソードである[3]。これは識字委員会が古典を改ざんして出回らせる悪書としてあげた本そのものである。

『民衆の事典』第十巻[4]には，このようにして古典を書きなおした本が複数挙げられている。

例えばゴーゴリの「タラス・ブーリバ」は改作された上，『タラス・チェルノモルスキイ』,『海賊タラス・チェルノモルスキイ』,『コサック首ウルヴァンの冒険』などの別のタイトルを付けて出版された。またゴーゴリの『ヴィイ』は『恐ろしい美女，あるいは墓場での三夜』というタイトルになって出版された。ツルゲーネフの『ベージンの草原』は『いたずら者の家の精』という短編小説に改作され，A.トルストイの『白銀公爵』は『黄金公爵』や『盗賊チュルキン』というタイトルで出版された。このほかにも多くの優れた作家の作品はルボーク作家によって，似て非なる作品に姿を変えて市場に出回った[5]。

---

1 スイチン，前掲書，56-57 頁。

2 *Рейтбрат А.* От Бовы к Бальмонту: Очерки по истории чтения в России во второй половине 19 века. М. : Изд. МПИ, 1991. С. 152.

3 スイチン，前掲書，61-63 頁。

4 Народная Энциклопедия : Народное образование в России. М. : Харьковское общество распространения в народе грамотности, 1910. Т. 10.「ナロードの教育」というテーマで編纂されたこの事典には，ナロードの教育史に始まり，同時代のナロードの教育状況や読書傾向，ナロードの間で読まれている文学の実態について詳細な記述がなされている。その中の第 18 章「ナロードの文学」という項目では，ナロードの間に広まるルボーク文学について論じられている。

5 Там же. С. 268.

これらは大抵，間違いだらけで内容もくだらないルボークを書く作家たちが，有名な作品を土台に書きなおした上で印刷した非常に程度の低い出版物であった。書きなおす仕方や程度はまちまちで，大幅に改作する場合もあれば，ごく一部だけを変え，ほとんど書き写しの状態で原作とは異なるタイトルを付けて出版するケースもあったという。

良書への方向転換

スイチンはこのような本を扱う出版社だったが，その後チェルトコフが主体となってはじめた「仲介者」という出版社の立ち上げに参加し，民衆のための本の出版を行う。これはニコーラ市場で売られるような出版物ではなく，質の高い立派な本を安く販売することを目的として設立した出版社であった。

スイチンの回想には，チェルトコフと始めて出会ったときのエピソードが出てくる。チェルトコフは1884年にスイチンの書店にやってきて，「こういった本を，大衆用に出版していただけないでしょうか[1]」と言って，「かくしから，ペテルブルグ識字教育委員会によって刊行された三冊の薄い本と，ひとたばの原稿を取り出した。[2]」スイチンはこの話に興味を持ち，これをきっかけにして仲介者が発足した。仲介者出版社が本の見本としたのはまさに識字委員会の本だった[3]。

仲介者は農業関連書のシリーズや大作家の文学作品をレパートリーとしていた。文学書の場合，作家に対して支払う原稿料を出版権の買取という形ではなく出版許可料の形で支払い，原稿料を安く押さえた。無償で原稿を寄せる作家もいた。仲介者に積極的に協力していたトルストイは書き下ろしの原稿を提供した[4]。

仲介者が出版した文学作品には，トルストイやコロレンコのように有名作家の作品が豊富に並んでいた。また挿絵はスリコフ，レーピン，キフシェンコの立派な絵を使っていた。このような内容で値段は百冊 80 コペイカだった。これに対して仲介者が参考にしたペテルブルグの識字委員会発行による同じ種類の本は一冊 7 コペイカであった[5]。仲介者の本は内容の点でスイチンがそれまで出版していたようなルボークとは一線を画した本であった。

その後の啓蒙活動

その後もスイチンは安くて内容の充実した教科書の販売を行った。教科書の出版は国の

---

[1] スイチン，前掲書，85 頁。
[2] 同書，85 頁。
[3] 同書，85 頁。
[4] 同書，84-87 頁，321-322 頁。
[5] 同書，86 頁。

認可を必要とし，寡占状態にあった。そのため値段は非常に高く，手軽に民衆が教科書を手に入れられる状況にはなかった。スイチン社は人脈と資金を駆使して認可を得，1895年から安価な教科書の出版を開始する。その後も教科書出版に関しては国民教育省等の機関からの圧力を受け困難な状況が続いたが，『小学校と知識』協会を設立し，教科書の質の向上と低廉化を目指す活動を行った。

仲介者や教科書出版の領域におけるスイチンの活動は明らかに啓蒙を目的としており，書物の質に関してはこだわりを見せていた。スイチンのこうした活動は識字委員会の出版と一見よく似ている。しかしその後の活動の展開を見ると両者は大きく異なる方向に進む。第3章ではスイチンと識字委員会の読者像の違いと照らし合わせながら，両者の出版方針の相違について考察する。

3. 啓蒙をめぐる立場の違い

識字委員会による読者の調査

80年代の初頭においてペテルブルグの識字委員会はまだ民衆読者を把握しているとは言いがたい状況にあった。民衆の読書の調査は名目上行われていたが，委員による小規模な調査にとどまっていた。民衆の教育水準や経済力に見合う文学作品の選別や意味付けは委員である評論家の評論に立脚して検討されていた[1]。

80年代前半は，読者把握の遅れが識字委員会の出版の失敗という形で明らかになった時期である。例えばこの時期に識字委員会の出版した本の中には，民衆の大人向けの児童書があった。これは，民衆がまだ未熟で，本はえり好みせず読む御しやすい読者だという観念に基づく出版だった。このような本は読者の関心をまったく引かず，在庫だけが膨らんだ[2]。こうした本は，評論に立脚する形で読者の傾向を予測していた指導部の方針にしたがって出版されたものだった。80年代の前半は出版活動の失敗を通じて，こうした指導部と啓蒙活動を実践する委員との間の対立が深まり，読者調査の必要性が明白になった時期だった。

読者の調査を組織化し，集中的に行う試みがペテルブルグ識字委員会で始まったのは80年代の後半に入ってからである。1888年には「ナロードが読むものに関する情報収集のためのプログラム」が作られ，翌年には「ナロードの初頭教育を拡大し，支援することを目的としたロシア国内に存在する個人および公的な施設」に関する調査が行われた。ペテルブルグ大学の調査グループとルバキン，プルガヴィン，仲介者の出版社がすでに読者

---

1 *Банк Б. В.* Изучение читателей в России : XIX в. М. : Книга, 1969. С. 163.

2 Там же. С. 165.

調査のためのプログラムを作成していた。識字委員会は出版社に大きく遅れをとりながらも，この作成メンバーを委員会に招き，かれらの影響下で調査を開始した[1]。

だが，調査は微々たる成果しか上げられなかった。調査資料はごくわずかしか集められず，そこから結論を導くのは不可能だった。識字委員会が成果を上げられなかった原因は識字委員会が民衆と直接つながるパイプを持たなかったことにあった。また識字委員会は民衆教育機関やゼムストヴォ，この問題に詳しい個人に実地調査を依頼し，その調査資料をもとに読者の分析をする方法を採用したが，こうした依頼先に対する権限を持っていなかった。その上政府は，民衆の読書や教育水準に関する調査自体が政府の権限の侵害とみなして識字委員会の調査にたいし妨害を行った[2]。

スイチンによる読者の調査

スイチンは 70 年代から読者の要求や関心の調査に熱心に取り組んできた。スイチンは版画や本を出版する際，行商人から地域による売れ筋の違いや，農民が好む題材について詳細な情報を得，その情報を元に出版物の内容を随時修正した。また，これをすぐに出版物に反映させていたため，スイチンのルボークは内容や絵柄が常に改良され，いつも瞬く間に売りきれた。

スイチンは同業者の間でまだ行われていない新しい方法も取り入れた。要望を教えてほしいという呼びかけをカレンダーに印刷し，カレンダーの買い手から直接情報を収集したのである。これらの投書は民衆の需要や趣味について幅広い知識をスイチンに提供した。こうしてスイチンはカレンダーだけでなく，民衆向けのルボークや物語を出版するための判断材料を得ていた[3]。スイチンはさまざまなジャンルの出版物を手がけており，その都度，内容や対象読者の設定に関して実験を繰り返した。

90 年代における識字委員会の成功

識字委員会は 80 年代には読者調査を試みながらも満足な成果が得られなかったが，その後，調査の水準は出版活動に役立つまでに向上した。90 年代の識字委員会は失敗を繰り返しながらも徐々に軌道に乗ってきた 80 年代の成果をうけてそれを大きく上回る点数の出版物を発行した。90 年代に入って出版活動が活発になった理由の一つは，識字委員会内部での権力闘争の結果，ラディカルなグループが主導権を握ったことが上げられる。このメンバーは，劣悪な書物の出回る低迷した書籍市場を委員会の主導によって改善し，

---

[1] Там же. С. 164.

[2] Там же. С. 165.

[3] Там же. С. 130.

より安定した供給と書籍の質の向上を実現することを目指した。

90 年代の読者調査では読者の実態を把握し，どのような書物をえらんで出版するべきかを焦点に，スヴェシニコヴァやルバキンたちが優れた報告書を作成した。スヴェシニコヴァは，ルボークと絵に関する調査を，ルバキンは『民衆は今何を呼んでいるか』という報告を書いた。

90 年代の初頭には委員会の出版物の売れ行きがよくなり，カルムイコフ，ムリノヴァなどの書店と新たに提携したり，ゼムストヴォとの結びつきを強め，図書館向けに大量の注文を受けるようになった。結局 80 年から 95 年までに，126 点の本を出版し，部数の合計は 2 百万部に上った[1]。

このように成功を収めたことから，識字委員会による読者の需要の把握は的確であったといえる。90 年代における識字委員会の活動は，委員会が出版界の市場調査や読者研究を行っている点で，民衆の啓蒙の失敗を繰り返してきた従来の出版社や啓蒙家のやり方を相対化する目を持っていたことを示している。

識字委員会の温情主義

識字委員会の出版方針はあくまで良書志向だった。始めは実用書や農業関連書が多かったが，90 年代には文学作品が増えた。民衆に安い値段で世界の古典文学の優れた作品を提供するという委員会の基本方針に添い，文学作品が 115 点，歴史 3 点，旅行記，地理は 3 点，自然科学 3 点，農業 2 点という配分で出版が行われた。文学作品は全体の 90%を占め，さらに 80%はロシア文学であった[2]。90 年代以降，文学，特にロシア古典文学の出版に際しての作品の選択は会議を通じて非常に入念に行われた[3]。

出版物具体例

識字委員会が出版した文学作品には，例えば以下のものがある。1887 年にレールモントフの『商人カラシニコフの歌』，およびクルイロフの寓話四部作，ツルゲーネフの『はたご』を出した[4]。ゴーゴリ作品も出版されたが，著作権を複数の相続人が持ち，非常に硬化だったため，識字委員会が出版件を購入できたのは『五月の夜』と『クリスマスの前夜』の二つだけだった。これらは 90 年に出版された。プーシキンやゴーゴリ，レールモントフの当り障りのない作品やクルイロフの寓話に代表される古典作品は，識字委員会の

---

1 *Блюм А. В.* С. 104.

2 Там же. С. 105.

3 Там же. С. 106.

4 Там же. С. 105.

出版目的の啓蒙的意図に合致するだけでなく，出版可能という点で万人向けという判断を下される性格を持っていた。90年代には，ほかにネクラーソフ，アクサーコフ，A. K. トルストイ，グリゴローヴィチのものを出版した[1]。

体制との軋轢

識字委員会は古典作品以外にも，同時代作家の新しい作品を出版した。たとえばガルシン，コロレンコの作品である。コロレンコは協力的で，自分の作品の再版を無料で許可した[2]。だが同時代のガルシンやトルストイの作品を出版したことが，識字委員会の閉鎖につながる結果となった。政府の警戒を招き，思想的に危険視され活動停止命令を受けたのである。その他にも，サルティコフ・シチェドリンの作品出版の企画が指導部の命令によって頓挫したエピソードは，識字委員会の出版目的として了解されていた範疇の外で不問に付されていた微妙な問題が存在していたことを提示している。

識字委員会の主要な目的は古典の改ざん，残酷な描写やばかげた場面の連続する低劣な読み物を駆逐し，内容の優れた一流作家による文学作品を民衆に提供することであった。だが，この対立図式以外にも政府の体制に反する文学と支障のない文学の区別があり，識字委員会はたびたび出版活動に介入を受けていた。

識字委員会の啓蒙観・民衆観

識字委員会はもともと自由経済協会の付属機関であり，農民に農業知識を広めることを目的とする機関であった。識字委員会にとっての啓蒙とは，国家の生産力向上の一手段として上から下に知識を伝達することだった。

当初，識字委員会の活動は農民を対象とすることを基本方針としていた。しかし識字委員会の主要な業務は，本の読めない民衆を対象にした教育活動ではなく，出版物を発行することだった。出版を通じて委員会の活動対象は農民に限らず，本を読むことのできる中流階層を含んだ広義の民衆に次第に切り替わっていった。対象とする集団が変わっても，識字委員会にもとからあった啓蒙の理念は変わらなかった。90 年代に識字委員会が読者として，あるいは活動対象として想定していたのはすでに文学作品が読める能力を備えた人々だった。

識字委員会は出版業務に際して読者の調査を行っていたが，出版方針が変わらない以上，調査が識字委員会の民衆観を変えるにはいたらなかった。その民衆観は判断力が弱く，蒙昧な集団というものだった。設立後一貫してとられた良書志向の出版方針は硬直的であり，

---

[1] Там же. С. 106.
[2] Там же. С. 106.

上層階級の教養をそのまま民衆に分け与えることが有益と考える観念を相対化することがなかった。識字委員会の活動に見られる啓蒙の観念は，教養のある階級，社会の上層階級の知識や芸術を下層に分け与えるという構図に基づいていた。

識字委員会が繰り返し行った俗悪な書物に対する批判はこれを示している。識字委員会の良書志向は，すでに権威の確立した上層階級の文化にのみ意味を見出し，民衆の間ですでに確立されていた俗悪なものを含む文化には意味を承認しなかった。明確な文化のヒエラルヒーへの信頼と，教育する主体としての上層階級，教育を受ける側としての民衆という観念が強固に維持された。

この観念は識字委員会に協力的で，出版方針に影響を与えたツルゲーネフの発言と連動している。ツルゲーネフは文学について，作家は民衆の読書に対して最大限の注意を払い，社会的利益と教育的意義のみを目的として書くべきだと述べた[1]。

識字委員会の良書志向は民衆に対する温情主義を反映するだけではなかった。古典に代表される良書は，中途半端に教育を受けた厄介な階層に上層階級と同じ文化を共有することを許し，そのことによって彼らを無害化するための手段としての役割を担っていた[2]。

スイチンの出版方針

識字委員会の硬直的な読者イメージに対し，スイチンが抱いていた読者のイメージは抽象的な集団ではなく，本を楽しむひとりひとりの読者であった。スイチンが回想の中で描くのは，版画とそれにつけられた詩から時事ニュースを知る農民[3]や，ボヴァー王子の物語を元に芝居ごっこをする子供，怪奇物語に改ざんされた小説を読んで楽しむ読者である。スイチンのこのような読者イメージは，前述したニコーラ市場での「悪書」の出版をめぐるスイチンの見解に密接にかかわっている。

悪書に対するスイチンの立場

スイチンは回想の中で，ニコーラ市場における「悪書」とそれを発行した自らに対して批判を行っている。スイチンは「わたしは本能的に，われわれはみな，なすべきことと違うことをしている，自分自身を，自分の商売を，自分たちの仕えている偉大な事業をはずかしめている，ということを理解していた。[4]」と述べる。そしてスイチンは三文文士ではなく，トルストイやコロレンコの作品を出版できるようになった状況を歓迎すべきこと

---

1 Там же. С. 100.
2 テリー・イーグルトン著，大橋洋一訳『新版文学とは何か』岩波書店，1997年。
3 スイチン，前掲書，43頁。
4 同書，64頁。

だと書いている。

しかし古典を改ざんした本だけでなく，スイチンが民衆向けに出版・販売した書物全般に視野を広げてスイチンの回想を読み直すと，スイチンが悪書の出版活動に抱いていた見解の中には，単なる批判で終わらない複雑な感情が見え隠れする。

「ニコーラ市場の欠陥は，私にはみな手に取るようにわかっていた。直感と推察によって，われわれが本物の文学からいかに遠いところにいるか，われわれの仕事では，善と悪が，美と醜が，知性と愚昧がいかに絡み合っているかを理解していた。[1]」という回想の記述は，スイチンがニコーラ市場で活動しながら，その活動の文学・教育上の価値の低さを冷静に把握していたことを示している。

さらにスイチンは「ニコーラ市場の作者たちは，文学界から離れたところで，だれにも知られず，世間の人びとからさげすまれながら，自分の『文学活動』にはげんだ。[2]」「それらはみな，本物のロシア文学が絶えず嘲笑しつづけてきたような本だった。[3]」と回想している。スイチンは，自分たちの活動の性質のみならず，ニコーラ市場の作家や本がまともな出版社や作家から受ける軽蔑のまなざしに対しても非常に自覚的であった。

では「本物のロシア文学」に属する人々についてスイチンはどのように書いているだろうか。スイチンはニコーラ市場が教養のある階層に属していた文学からは切り離されていたことに言及し，ニコーラ市場で売られる大衆的な小説は「文学の地下室」で生み出されたもので，「ひとすじの光もさしこまず，ほんものの作家の誰ひとりとして覗いてみもしなかったものだった。[4]」と述べている。ここには民衆の生活における読書に対して無頓着と無理解を続けてきた文学者や教養階級に対する皮肉が読み取れる。

ニコーラ市場で売られる本は確かにひどいものだったが，それは悪書の販売に至る必然的な状況があったためでもあった。能力のある作家は民衆向けの本にために作品を書くことがなかったし，そのような作家の出版権料は高額で，市場の小さな出版社にそれを支払う能力はなかった。

スイチンの「ニコーラ市場は自ら創作刊行し，なかば文盲の田舎の読者に送りとどける特別の方策をみずからさぐり，見つけていった。[5]」という記述には，見捨てられてきた民衆の読者に読み物を提供したのはニコーラ市場だという自負すら伺える。

ニコーラ市場の本の世界

---

[1] 同書，84頁。
[2] 同書，57頁。
[3] 同書，56頁。
[4] 同書，56頁。
[5] 同書，56－57頁。

ニコーラ市場の作家や出版社が行ったのは，民衆の娯楽としての読書を作り出すことだった。民衆の関心と要求がニコーラ市場を動かしていた。出版社は，民衆が何を面白がるか，情報網を駆使して需要の把握に努めた。彼らが供給する本が民衆の興味や読書欲を開発し，娯楽のひとつの様態を作っていった。

ニコーラ市場を害悪としかみないインテリの目には，読む本の内容がすべてである。内容が悪ければ読書の意味がないどころかむしろ害となる。民衆の本の世界は，存在しているだけでは意味を認めてもらえなかったのである。

スイチンが抱いていた自負は，自分が民衆の本に対する興味を直接捉え，要求を満たしているという誇りだった。前述したスイチンの読者調査に現れているように，スイチンは個々の人間が読書をどう楽しんでいるかに関心を持った。本の内容は重要視していたが，それ以上に民衆が読書を娯楽として享受すること自体に価値を見出していた。

スイチンによる啓蒙活動

そうは言っても，ニコーラ市場での自分の仕事に対してスイチンは批判も行っている。自負と抱き合わせのこの複雑な感情は，民衆の本の出版を巡る数々の問題に対峙する中で生まれたものであり，単にスイチン個人の問題ではない。民衆の本の劣悪さはニコーラ市場の出版者にとっても常に改善すべき課題だった。

スイチンは仲介者の立ち上げをきっかけに，悪書の出版から脱して安くて良い本の出版に取り組んだ。その際に民衆の啓蒙に貢献するという考えは活動の重要な柱になっていた。しかしスイチンの活動は，識字委員会の良書志向とは目指すところが大きく異なっていた。

識字委員会は民衆の読書から悪書を駆逐し，そうしたものを好んで読む悪習を正すこと，いわば矯正することを目指していた。こうした出版方針を突き詰めた結果，90 年代の識字委員会の出版物は文学作品がほとんどを占めることとなった。90年代の識字委員会は，民衆の需要を把握し，出版活動で十分な成功を収めたが，よき趣味の文学に一元化という結果を招いた。識字委員会の出版物の一元化は良書による民衆の読書の矯正と啓蒙を基本的な理念としており，活動対象が悪書しか持たない民衆という固定化した読者イメージにもとづいていた。

それに対してスイチンは 80 年代以降，出版物の多様化を追求した。農民向けの祈祷書や初頭・中等学校向けの視覚教材，産業教育のための技術書，百科事典，新聞などスイチンが手がけた出版物の種類は枚挙に暇がない。こうした多様な本の開発は，読者が実際に本に向かうときのそれぞれの興味を重視する読者観に根ざしたものであった。子供向けの文学作品を出版するにしても，子供の年齢に応じて幼児向け，少年向けと細かく分けた。

スイチンは，同時代に民衆向けに出版された教訓や説教に終始したり幼児言葉で書かれ

た本を無意味だと述べている[1]。人々を惹きつけるのは啓蒙的意義があるかどうかではなく，面白いかどうかという点だった。スイチンは自分が生涯追及するべき目標として民衆のために面白く，安い読み物を提供するという方針をはっきりと掲げた[2]。スイチン出版社の本の多様性はこの方針を反映したものであった。

4. 終わりに

19 世紀末は大衆向けの書物や新しいタイプの出版物が次々と作り出された時期であった。民衆向けの本の出版において，識字委員会やゼムストヴォの活動もまた重要な役割を負った。しかし本の多様性と大衆化の推進という点でスイチン出版社などに代表される民間の出版社は世紀末の出版状況を大きく塗り替える存在となった。売れ行きを優先し，市場を拡大することを重要な目的とする企業として大衆化の推進は必然的でもあった。スイチン出版社は識字委員会を始めとする出版社が基盤としていた固定的な民衆観が解体した後，出版状況で新たな勢力図が作られる過程に位置していた。現実と絶えず交渉を繰り返しながら，事業を拡大しようとする企業活動が新たな出版界を構築する大きな原動力となった。

こうした出版社が推し進めた民衆向けの出版の基盤には，民衆の観念や啓蒙の概念の大きな変化があったのではないだろうか。今回の論文では識字委員会とスイチン社の比較を通じてこの変化を指摘するにとどまるが，今後，スイチン社の行った教科書やルボークの出版の研究を通じて詳細に検討することを目指している。

A comparison between the I. D. Sytin publishing-house and St-Petersburg committee for literacy.

ONO Tokiko

This paper examines the activities of the I. D. Sytin publishing-house and St-Petersburg

[1] 同書，71 頁。こうした本は誤解に満ちた民衆観にもとづいて刊行されたが，民衆の関心をまったく惹かなかった。

[2] 同書，75 頁。

committee for literacy that published literary works, especially for masses at the end of the 19-th century in Russia. Through a comparison between them, we are in a position to analyze the change in their publishing activities and their representation of the mass image.

First we examine their publishing policies to publish books for the people. The St-Petersburg committee for literacy supplied literary works of excellent taste. It chose classical works of famous writers and traditional folklorists. Its activities were based on the belief that publishers should provide enlightenment to the people. On the other hand Sytin published chapbooks that were written by hack writers. Though he realized that they were books that would be criticized as lowbrow literature by intelligentsia, he also knew that the mass readers wanted such interesting and low-priced books that he published.

These publishing policies were related to images of readers that the two publishers represented. The St-Petersburg committee for literacy considered readers to be educated people who should be enlightened with good books. On the other hand, Sytin had an image of the mass readers as people who read for their entertainment. He believed that the people had the capacity to distinguish interesting works.

The image of readers, affected their publishing business. The St-Petersburg committee for literacy published many good books till the year it closed. It failed to research the readers' needs and only published books for enlightenment. On the other hand, Sytin expanded into production of various publications. He grew into one of the biggest publishers in Russia because he was always aware of the readers' needs. He reflected results of marketing research in business.

It was Sytin and other private publishers that found new mass readers, that led the publishing market to expand. The differences mentioned above between the St-Petersburg committee for literacy and Sytin, represent a turning point of publishing activities at the end of the 19th century in Russia.